

「地域交流・高齢者福祉複合施設ひだまりの里」のグループホームの使われ方
 ー山口県阿武町における高齢者福祉施設のネットワーク構築に関する研究 その7ー

福祉複合施設 グループホーム 使われ方
 廃校活用

正会員 ○三島 幸子*
 中川 真衣**
 正会員 中園 真人***
 正会員 山本 幸子****

1. はじめに

本報ではグループホーム部門(図1)の使われ方調査結果を元に、生活行為と場の関係の分析を行い、廃校を転用した施設の空間機能評価を行う。調査内容は(1)利用者・職員属性に関するアンケート調査、(2)施設管理者への施設運営に関するヒアリング調査^{注1)}、(3)家具配置の実測(4)使われ方調査である。生活行動場面の記録は、2011年10月24日ー10月30日の7日間、利用者及び職員の施設内での行動観察を行い、10分毎に行為の内容と場所を平面図に記録するとともに写真撮影を行い、併せて終日ビデオ撮影(図1にビデオ設置位置を示す)を行った。

2. 利用者及び職員の属性と勤務体系

利用定員は9名であるが、調査時には生活支援ハウス利用者が1名おり、グループホーム内で生活していたため調査対象に含めた。以上の10名の基本属性を表1に示す。性別は女性が8/10名と多く、年齢は70~90歳代である。シルバーカーの利用を含めて自立移動が可能な利用者は8名おり、2名は手引き歩行及び車椅子で移動する。介護度は要介護1~3であり、認知度はI~IIIbと差がある。4名の居室には簡易便所があり、夜間に使用される。

職員の基本属性を表3に示す。10名の職員がシフト制で勤務しており1日の勤務人数は約5名である。夜勤(17:30~9:30)は1名の職員で対応しており、平均5日/月の夜勤勤務に従事している。

3. 一日の生活プログラムと生活時間

一日の生活プログラムは大きく、1)起床・洗面 2)朝食 3)自由時間 4)昼食 5)自由時間・おやつ 6)入浴 7)夕食 8)自由時間 9)就寝から構成される。朝食は8:00、昼食は12:00、夕食は17:30または18:00から始まり、10:00と15:00にはお茶が出される。起床・就寝時間は自由で、自由時間の過ごし方は利用者によって異なる。

29日は午前中から午後にかけての長時間、利用者・職員全員で外出をしたため、29日を除いた6日間の6:00~21:00の各部屋における1週間の滞在時間の平均値を図2に、利用者と職員の居場所の1例を図3・図4に示す。利用者は各室の1日の滞在時間と歩行介助の観点から居間中心型(F・I)、自由行動型(E・G・H)、居室中心型(A・D・J)

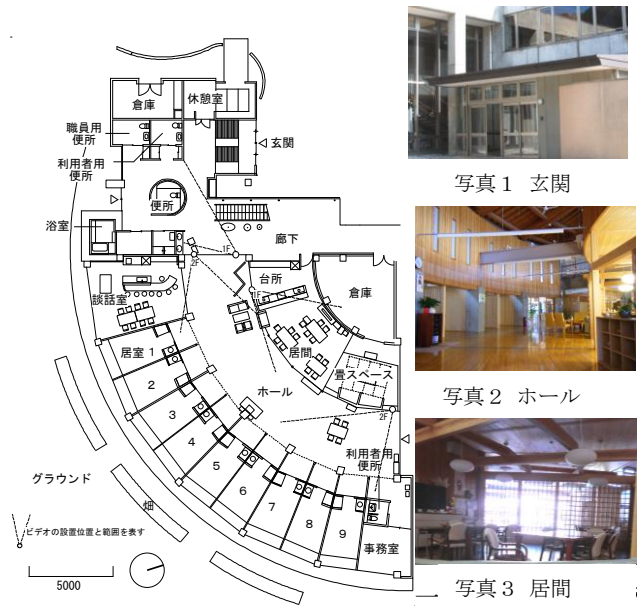


図1 平面図

表1 利用者の基本属性

利用者	性別	年齢	移動方法	介護度	認知度	簡易便所
A	F	91	シルバーカー	要介護3	IIIb	有
B	F	78	車イス、手引き歩行	要介護3	IIb	有
C	F	86	車イス、手引き歩行	要介護2	IIa	有
D	F	70	自立歩行	要介護1	IIa	無
E	M	82	自立歩行	要介護3	IIIa	無
F	F	86	自立歩行	要介護1	I	無
G	F	90	自立歩行、杖	要介護2	IIb	有
H	F	86	自立歩行	要介護1	IIa	無
I	F	90	シルバーカー	要介護3	IIb	無
J	M	87	自立歩行	要介護1	IIIa	無

表2 職員の基本属性

職員	性別	年齢	職歴(経験年数)	勤務年数
a	F	42	22年7ヶ月	1年7ヶ月
b	F	61	21年	1年7ヶ月
c	F	36	3年	1年6ヶ月
d	M	25	1年7ヶ月	1年7ヶ月
e	F	64	34年7ヶ月	7ヶ月
f	F	22	2年7ヶ月	7ヶ月
g	M	24	2年7ヶ月	7ヶ月
h	F	17	15年	7ヶ月
i	F	64	10年7ヶ月	1年7ヶ月
j	F	33	5年7ヶ月	7ヶ月

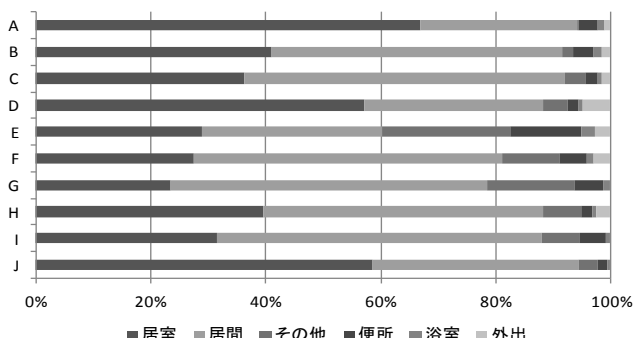


図2 1週間の滞在時間の平均値

The use of the group home of the abolished school 'Local Exchange and Elderly Welfare Complex Facility, HIDAMARI-NOSATO'
 Network Construction of Welfare Facilities for Old People in Abu Town Yamaguchi Prefecture (Part 6)

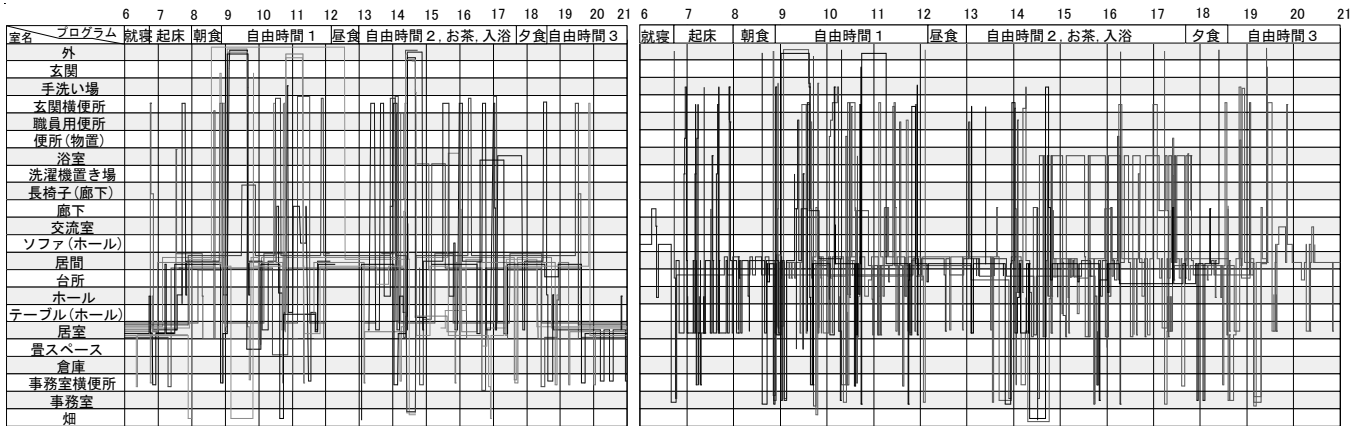


図3 利用者と職員の一日の行動形態(10月26日)

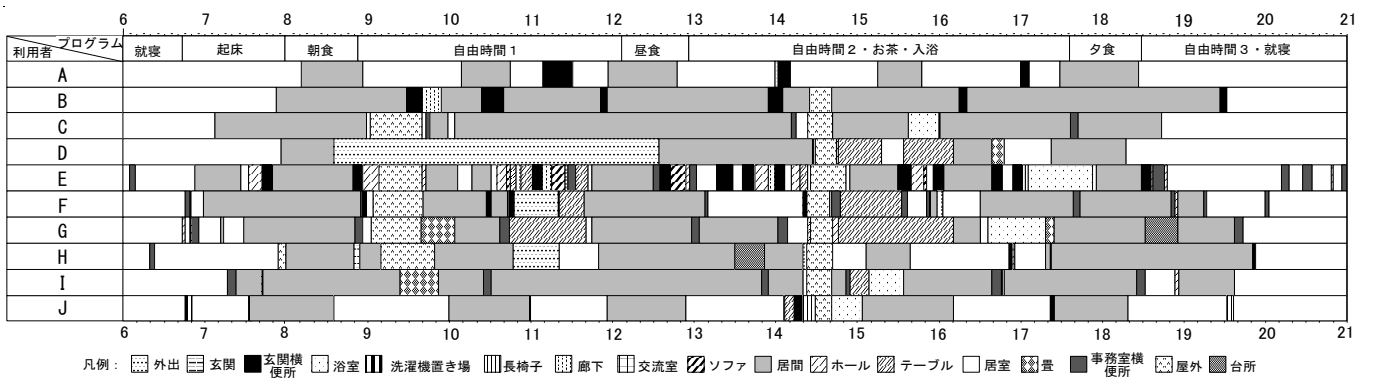


図4 利用者の一日の生活時間と居場所(10月26日)

居間中心・介助型(B・C)に分かれる。

居間中心型は歩行に介助を必要としないが、1日の大半を居間で過ごす利用者のことである。主にテレビ観賞・会話を楽しんでいる。

自由行動型は歩行に介助を必要とせず居間を中心にホールや畑など各利用者の好む場所での活動も多く見られる。このタイプは移動回数が最も多く行動範囲も広い。

居室中心型は食事以外の時間は居室で過ごす事が多く他の利用者との関わりもあまり見られない。

居間中心・介助型は介護度が高く歩行に介助が必要なため移動回数は最も少なく、職員の目の届く居間で過ごす事が多い。居間の滞在時間が長い場合は居間のソファに移動するなど居間内での移動は見られる。

4. 一日の生活行動

ある1日の生活の行為と場を図5に示す。この日を中心に1日の生活行動を以下に示す。

1) 起床・洗面

早い利用者は6:30頃から居室外での行動を開始するが、朝食間際まで居室におり職員の呼びかけで居間へ来る利用者もいる。朝食までの間は居間で過ごす利用者が多く、職員にお茶を入れてもらうなどして朝食を待つ(図7-A)。

2) 朝食

朝食は居間の決められた席でとる。調理や盛り付けは

全て職員が行うが、台ふきなど配膳の準備は利用者も手伝う(F,G)。朝食が配られた利用者から順に食べ始め、利用者が食事を始めても職員1名は台所で調理器具を片付けている。もう1名は空いている席に座り、利用者の様子を見ながら食事をとる。朝食を終え、薬を飲んだ利用者から自由時間に入る。

3) 午前の自由時間

自由時間の過ごし方は利用者によって大きく異なる。

居室中心型の利用者は朝食を終えるとすぐに便所へ行き居室へ戻る。居間中心型と介助型の利用者は居間に残りテレビや会話を楽しむ。自由行動型は居間や自分の好みの場所で過ごす。利用者の家族など来客が来ると居間で会話を楽しむ。職員が持ってきた洗濯物を畳スペースで畳んでいる。畳に座る利用者もいるが、居間の椅子を畳の近くへ持っていき作業する利用者もいる(図7-C)。

職員が午前中の自由時間を利用して、数名の利用者を連れての買い物や散歩など施設外での行為も頻繁に見られた。外出する際は普段事務室横を使用する利用者も玄関横便所を使用する(図7-D)。

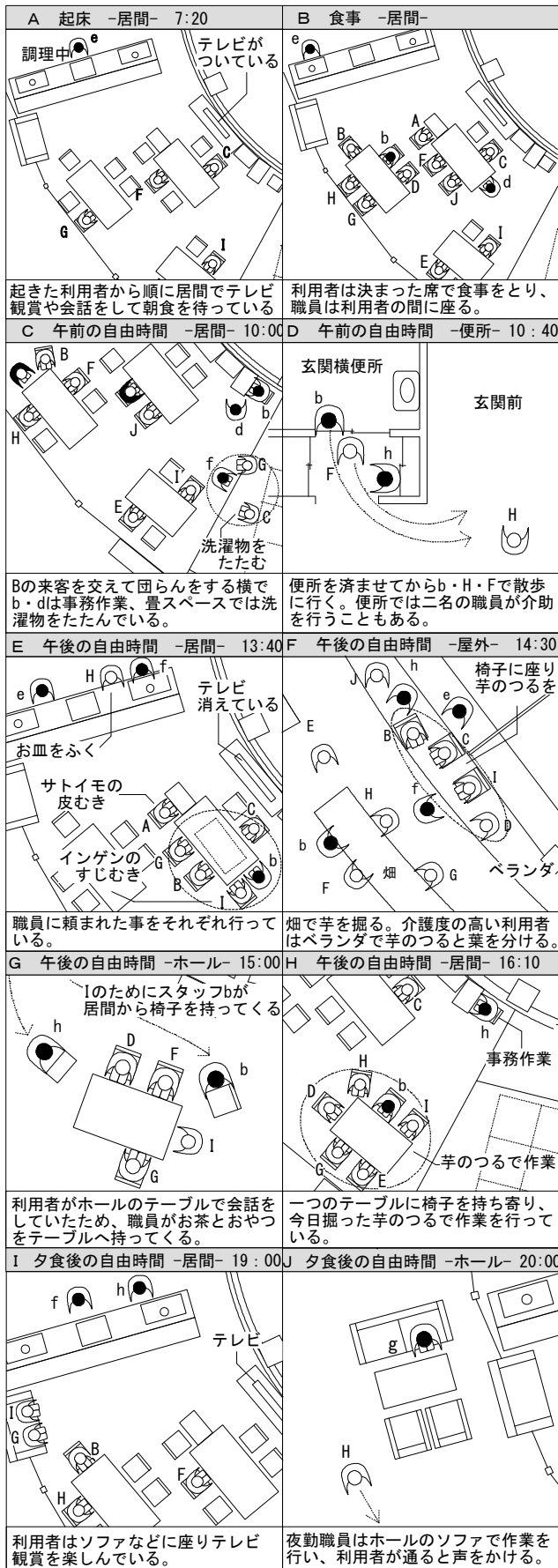


図5 利用者・職員の行為と場

4) 昼食

昼食は主に1名の職員が台所で調理し、直前の盛り付けなどは2名で行うこともある。昼食前は居間に全員が揃っていない場合も多いため、職員が声かけを行う。ホールにいる利用者はすぐに把握できるが、廊下の死角にいた利用者を探す場面も見られた。朝食と同様に配膳に関しては利用者も手伝う。

5) 午後の自由時間、お茶、入浴

自由時間における居場所は居間・居室・ホールが主である。昼食後1名の利用者は台所で食器ふきを手伝っており(H)、他の利用者もそれぞれ職員に頼まれた事を居間で行っている。このように利用者が何かに集中している時などはテレビは消されている(図7-E)。

午前中と同様に外出や畑へ行くこともあり、この日は畑で芋掘りを行っている。自由行動型を中心として数名の利用者は靴に履き替えて畑へ行き次々と芋を掘っていた。居間中心・介助型、居室中心型の利用者は居室からそのままベランダへ出て職員が準備した椅子に座り、芋のつると葉を分ける作業を行っていた。職員2名は外で利用者と共に芋を掘り、1名はベランダの利用者の介護をしている。調理担当の1名は台所に居り、必要な時には介助を手伝う(図7-F)。

芋掘りの後、ホールのテーブルで3~4名が座って会話をする場面が見られた。事務室横便所に近いため、便所に行った利用者が帰りに立ち寄る姿も多く見られた。その場合は職員が席までお茶とおやつを持っていく(図7-G)。その後、居間の机に椅子を持ち寄り、畑で採れた芋のつるのすじをむいている(図7-H)。

6) 入浴

入浴介助は1名の職員が行い利用者1名につき20~40分の時間を要する。多い日で1日に5名入る。洗面用具は個人のものであるため、入浴前後に利用者または職員が居室へ立ち寄る。介護度の低い利用者に関しては終始付き添いはせず、時折様子を見に行く。

7) 夕食

夕食の開始時間は日によって変動が見られるが、座席の位置や食事の形態は朝食・昼食と同様である。

8) 夕食後の自由時間、就寝

就寝前はテレビ観賞・読書・会話など動きの少ない行為が多く見られる。自ら台所で食器ふきを手伝う利用者(G)もいる(図7-I)。食事後1時間ほど経つと居室中心型の利用者から順に、居間にいる利用者は段々少なくなり便所を済ませて居室へと戻っていく。全員が居室へ戻るとホールは消灯される。夜間に便所以外で居室を出る利用者は見られず、居室内に簡易便所がある利用者は居室から出ることは無い。

夜勤の職員は利用者の動きに気付きやすい居間もしく

はホールのソファで作業を行い、一定の時間ごとに居室内の利用者の様子を窺う(図 7-J)。

9) 行為と空間の関係

食事は全て居間の決められた席でとり、利用者と職員が食事をとるには十分な広さである。台所はカウンターキッチンのため食事時の利用者の様子を見ながら作業を行うことが出来る。しかし、台所には片側しか出入り口が無いいため居間への移動距離が長い。

自由行動では、主に居室・ホール・居間が使われている。これらの空間は隣接しているため職員による利用者の居場所把握が行いやすいという利点がある。居間での団らんにはダイニングテーブルやソファを利用しているが、ソファは居間に入りきっていない。畳スペースは居間と一体化して使用されている事が多い。また居室以外で横になれる唯一の場所であるが、他の空間から隔離されているため利用頻度は少ない。

廊下に隣接した 3 つの便所の位置は改修前と変わらず、水廻りを集中させるために浴室も廊下に増築されている。またホールの奥には事務室があるため横に位置する便所は職員用として計画されたと考えられる。しかし、9 番目の部屋の利用者が玄関横まで行くのは距離があるため利用者は玄関横(居室番号 1・2)と事務室横(3・4・6・7・8・9)とを使い分けており、職員が玄関横奥側の便所を利用している。廊下の中央に位置する便所は倉庫として使われている。理由としては便所が多すぎると利用者の混乱を招くことや、職員の掃除場所が増える事が挙げられる。さらにこの便所の入り口はホールからの死角となっており、職員の目が行き届かないという点もあると考えられる。またこの便所により屋外への出口付近も死角となり利用者の居場所把握が難しくなっている。事務室横便所の前には椅子が置いてあり、便所が混雑する時も座って待つ事が可能だが、玄関横便所では待つスペースが無い。

入浴では脱衣室と浴室を使用する。終始見守りの必要が無い利用者の場合は同時に他の利用者の様子も見ることが可能だが、浴室は廊下の奥に位置しているため居間との往復に手間を要する。

利用者が居室や居間から移動する時には必ずホールを通る必要があり、ホールと居間は隣接しているため利用者の行動が把握しやすく、移動中のコミュニケーションも多く見られる。居室を出るとすぐに居間が目に入ってくるため自然と居間へ向かう事が出来る。しかし、居室へ戻る際には同じ扉が一行に並んでいるため迷う利用者もいる。その対策としてドアの前に目印となる飾りをつ

けている利用者が多くいた。

6. まとめ

本論ではひだまりの里グループホームを対象に、施設の使われ方の特徴に関して検討した。得られた知見は以下の通りである。

1) 居間

居間は利用者の滞在時間が多く団らんにも利用される場所である。しかしながら現在の居間の面積ではダイニングテーブル以外のスペースをとる余裕が無い。居間には団らんスペースを設け、そこに畳スペースを連結させる事が望ましいと考えられる。

2) ホール

ホールは主に移動空間として利用されている。テーブルがあることで多少の滞在は見られるものの、日常的なホールとしての利用頻度は少なく、吹き抜けのため暖房効率も悪く冬場は居間と遮断される。

3) 便所・浴室・廊下

便所は施設の両端に設けられているため移動に時間がかかる。小学校の広い廊下は高齢者の住宅にも有効に活用できるが、廊下は居間を始めとした主要部分から隔離されているため死角になりやすい。したがって、グループホームという家庭的な要素を持つ施設においては、廊下空間の視認性の向上や住宅的雰囲気を持つしつらえの工夫が今後の課題と考えられる。

注

注 1) 居室の振り分け方法、居間の座席、買い物方法、勤務内容、勤務体系、各便所の利用形態、1 週間の入浴回数、夜間の利用者の排泄時間、

謝辞

本研究を進めるにあたり、ひだまりの里グループホーム施設長、施設職員の方々、利用者の方々には度重なる調査にご協いただいた。末尾ながら記して謝意を表します。

* 山口大学大学院理工学研究科 修士

** 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

*** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

**** 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

* Graduate student, Yamaguchi Univ.

** Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

*** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng

**** Assistant Professors, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.